

## バウムガルテンの『美学』における理性の類比者の概念

松尾 大

近代美学の父バウムガルテンにおいて理性の類比者 (analogon rationis) という概念が最初に現れるのは『形而上学』においてであるが、美や藝術の領域へのこの概念の適用は『美学』を待って初めて行われる。そしてこの概念が彼の美学にとって枢要の位置を占めていることは、『美学』冒頭における有名な美学の定義中に「理性の類比者の技術」というものがあるという一事を以てしても分かる。しかしその重要性の割りにその内容は知られていない。バウムガルテンの直弟子マイアー、メンデルスゾーン、ズルツァーらがいずれも受容しかねているのも、その難解さ故にであろう。今世紀のバウムガルテン解釈者らも、この理性の類

比者の概念に関しては、必ずしも適切な解釈を行っているとは言い難い。本論文の目的は、バウムガルテンの著作『美学』におけるこの概念の内実を明らかにすることにある(従って、他の著作における理性の類比者の概念の内包は、本論文の中心的関心事ではなく、『美学』における理性の類比者の概念の内実の解明に寄与する限りに於いて顧慮される)。以下の論述は、第一章で従来の一解釈を紹介し、第二章でその批判を紹介して我々の解釈を提示するという手順を採る。

## 一 従来 of 解釈

我々が『美学』における理性の類比者の概念を解釈するにあたって先ず準拠すべきは、『美学』に先立つ著作『形而上学』においてこの概念の正規の規定を行うテクストである。そこでは、理性の類比者は事物の連関 (nexus rerum) を混雑に表象する能力として規定されている。およそ類比 (analogia) 一般は、バウムガルテン的文脈では、関係 (比) の同一性であるから、二つのものの間の同一性とともには差異性をも含意する。理性の類比者の場合、それが類比関係に立つ相手は理性 (ratio)、それとの同一性とは、事物の連関の表象、差異性とは、理性が事物の連関を判明に表象するのに対し、理性の類比者はそれを混雑に表象するということである。この仕方規定される限りで理性の類比者は、世界における存在者の連関一般を表象する力として、単に藝術に留まらず、日常経験全般にも亘る一層広い作用領域を持っている。しかし、『美学』において取り分け美や藝術の領域で展開されることによって、この概念には——特に「事物の連関」という部分に関して——更なる限

定が加わっている筈である。この点で従来 of 解釈を記述するために、バウムガルテンの『美学』の基礎になっている概念装置を利用したい。それは対象 (objectum) と表象 (representatio) なし思考 (cogitatio) の区別である<sup>(4)</sup>。

例えば、ソクラテスという対象は様々の仕方表象、思考される。それらの表象、思考は互いに異なっているが、それにも関わらず、ソクラテスを共通の対象として持つ。そして、藝術も表象、思考と見做される限りで、現実の経験と対象を共有する。他方、表象や思考は、元からある対象と、新たに形成された形式的部分との複合体である。この概念装置に従って従来 of 解釈を記述すれば、それらは、当該の「連関」を対象の連関ととるか、詩的表象、すなわち全体としての詩を構成する複数の表象の間に成り立つ連関ととるか、いずれかである。以下において我々はこの両グループを順次取り上げ、その内容を概観したい。取り上げる順序は概ね公刊年順である。

### 1 対象の連関説

第一のグループに属する解釈で最初に取り上げるのは、ボイムラーである。彼は理性の類比者を「美的真理性の発祥

地」と呼び、<sup>(5)</sup> 理性の類比者の関わる連関を解釈する際に、専らバウムガルテンの『美学』の美的眞理性に関する論述部分に属する幾つかのテキストに準拠する。その一つは、対象と他のものとの連関に言及する次のものである。<sup>(6)</sup>

「美的眞理性は、II、美しく思考されるべき対象と理由及び帰結との連関を——但しそれが理性の類比者によって感性的に認識されるべきものである限りにおいて——要求する。」(Veritas aesthetica requirit obiectorum pulcre cogitandum, II, nexum cum rationibus et rationatis quatenus ille sensitive cognoscendus est.)<sup>(7)</sup>

ここで問題になっているのは、例えば大衆の怒りという原因がコリオラーヌス追放という結果を招いたというような因果連関である。<sup>(8)</sup> 従って、この場合、連関とは、或る対象と他のものとの間に存在するものである。ポイムラーが引くもう一つのテキストは、思考対象における「統一性」に言及する次のものである。<sup>(9)</sup>

「それ故、美的眞理性も、それが感性的にとらえられる限

りて、自己の思考対象における両種の統一性を要請する。」(Hinc et veritas aesthetica utramque poscit unitatem in cogitandis suis, quatenus sensitive deprehendi potest.)<sup>(10)</sup>

ここでいう両種の統一性とは、絶対的及び仮說的統一性である。前者は、詩の思考対象のうちに、矛盾する徴表が発見されてはならないというものであり、後者は、事物の本性から帰結する複数の徴表間の統一性である。例えば、オデッセウスがトロイア戦争参加を回避するため狂気を装ったことや、トロイア攻略のための木馬の計は、いずれも智略の士としてのオデッセウスの本性を原因に持つことによって仮說的統一性が保たれている。従って、ここで問題になっているのは、或る対象が持つ幾つかの徴表同士の連関である。このように、因果連関であれ、統一性であれ、いずれも連関が問題になっていることは、そもそも美的眞理性という品質が対象の形而上学的眞理性の写しとして規定され、更にこの対象の形而上学的眞理性が対象における連関の存在として規定されていることから考えれば納得がいくことである。<sup>(11)</sup>

次にリーマンであるが、彼が理性の類比者を解釈する際に準拠するテクストは、バウムガルテンの『詩に関する諸点についての哲学的省察』(以下『省察』と略記)§七十二である。<sup>(12)</sup>バウムガルテンはそこで詩的表象の統合方式として三種の「順序」(methodus)を区別している。

「§七一に従って同位的に配列された諸表象のうち幾つかは、前提が結論と統合するように、幾つかは類似したものが類似したものと、類縁のものが類縁のもの<sup>(13)</sup>と結合するように、幾つかは感覚と想像の法則に従って結合しうる。従って明晰な順序においては、歴史家の順序、才知の順序、理性の順序が可能である。」

(Quum secundum §71 coordinatarum repraesentationum quaedam possint vt praemissae cum conclusionibus cohaerere, quaedam vt simile cum simili et cognatum cum cognato, quaedam per legem sensationis et imaginationis, *methodus historicorum, ingeni et rationis in lucida possibilis.*)<sup>(13)</sup>

一つの詩を多くの表象の同位的かつ継起的な連続と考える

ならば、それら表象が行き当たりばつたり<sup>(14)</sup>に選択、配列されるのでない限り、それらを選択、配列する何らかの方式が要請される。そういう順序の種類としてバウムガルテンは今の引用箇所<sup>(15)</sup>で三つのものを挙げてゐる。この分類自体はバウムガルテンの『形而上学』§§二六五—三四六に見られる存在者間に可能な全ての連関の種類に対応するものであるが、これらの順序は、その一部である感覚の法則が、世界の状態の順序に表象の順序を合わせることであり、他方、世界の状態とは対象としてのそれの他には考えがたいことからして、対象の連関に表象の連関を合わせることを内容とするものといえる。つまり、『省察』のこの箇所は、ポイムラーのところ<sup>(16)</sup>で触れた『美学』のテクストが真理性の観点から取り扱うもの——対象レベルの連関——と同じ問題を、順序という別の観点から取り扱うものといえる。さて、リーマンはこのうち「理性の順序」の類比者として理性の類比者を解釈する<sup>(17)</sup>。然るに、理性の順序とは、対象レベルにおける原因と結果というつながりである。従って、それとの類比において考えられている理性の類比者の表象する連関も対象の連関と解されていることになる。

三番目に取り上げるのはフランクである。彼は感性的表象を特徴づける「混雑性」を「豊かさ」と言い換え、それを更に、多くの徴表が「互いに結び付いていること」とペラフレーズする<sup>(15)</sup>。理性の類比者はこの「豊かさ」において事物の連関を表象する<sup>(16)</sup>。つまり連関とは感性的表象の諸徴表の間にある連関である。ところで、精神がそれらの間に秩序を樹立するのに先立って、理性の類比者はかかる感性的表象を供給するとされる<sup>(17)</sup>。従って「連関」は既に世界に存在するものと見做されていることになる。さて、彼の著作のタイトル『認識としての藝術』が既に端的に示す如く、詩も認識の一種と考えられるから、結局のところ、フランクは連関を詩の対象の連関と解していることになる。

## 2 詩的表象の連関説

以上の諸解釈が、対象レベルの連関を、理性の類比者の表象する連関と考えるのに対し、以下に取り上げる解釈は、詩的表象レベルの連関を理性の類比者の表象する連関と考える。先ずイエーガーであるが、彼はバウムガルテンが『省察』§六、一〇において挙げる「感性的表象の連関」(nexus representationum sensitiarum)が理性の類比

者の表象する連関である<sup>(18)</sup>と考える。次いでイエーガーは『省察』§六八を引く。そこでは世界の諸部分が、その創造主の栄光を賛美すべく配列されているのと類比的に、詩の部分表象は主題を明瞭にすべく配列されるべきであるとされる<sup>(19)</sup>。ところで、多様なものが一点に収斂することが完全性の定義であるから、世界と藝術作品にはともに完全性が帰せられる<sup>(20)</sup>。そして、「連関」とは、これら多様なもの同士が取り結ぶ関係ということになる。

次に取り上げるのはペツォルトである。イエーガー同様、彼も理性の類比者の解釈にあたっては、世界と藝術作品とを類比においてとらえる『省察』に準拠する。「藝術作品の完全性はコスモス自体の完全性の類比者となる<sup>(22)</sup>」。そして、詩を構成する多くの表象が互いに有する関係を、理性の類比者が表象する連関と考える。この連関によって多様な詩的表象は一なるものにおいて統合されるから、詩には完全性が帰属することになる<sup>(23)</sup>。従って、彼においても、イエーガー同様、連関は完全性を構成する多様なもの同士の関係と見做されていることになる。尚、彼は問題になる理性の類比者の種類として趣味を挙げる<sup>(24)</sup>。これは理性の類比者の幾つかの種類の中でも趣味が完全性に関わるも

のであること(25)の自然な帰結である。

## 二 理性の類比者の実像

既に見た如く、理性の類比者は「事物の連関を混雑に表象する能力」として規定されるが、従来の解釈は、この「連関」を、対象レベルの連関と解するか、或いは、詩的表象同士の連関と解する。我々は先ず従来の解釈を批判し、次いで我々自身の解釈を提示するという順序で論述を進めたい。

### 1 対象の連関説批判

我々の目的は、『美学』における理性の類比者の内包を明らかにすることにあつた。従つて、その際の中心的論拠は『省察』でも『形而上学』でも他の何物でもなく『美学』内部における理性の類比者の用例に求められるべきである。我々は考へる。先ず、理性の類比者を対象レベルの連関に関係づける用例が『美学』にあるであろうか。確かに、ポイムラーのところでは触れたように、『美学』の美的真理性に関する論述部分には、対象レベルの連関を理性の

類比者の相関者とする用例が存在する。そしてこれは、既に述べたように、そもそも思考の美的品質のうちでも真理性の判断に限つては対象レベルの連関の存在の認定をその前提条件とするから、納得のいくことではある。しかし乍ら、理性の類比者が対象レベルのものを相関者とする用例は、『美学』における「理性の類比者」の九八の用例で、理性の類比者の相関者が特定できるもの八三のうち二五、すなわち約三割であり、それも美的真理性の論述部分に集中しており、これを以て『美学』における理性の類比者の全体像を描くのは、不当な飛越を行うものと言わざるをえない。

### 2 詩的表象の連関説批判

理性の類比者の表象する連関を対象レベルに定位する第一の立場が、『美学』内部にある「理性の類比者」という語の用例に、それでも多少は支えを見出しうるのに対し、詩的表象の同位的配列と解する第二の立場は『美学』内部にはその典拠を見出すことができず、『省察』にそれを求めねばならない。確かに『美学』においても、詩的表象間の関係は認識の完全性を構成するものとして、その問題領

域の内部には位置する<sup>(27)</sup>。しかし、この関係が「連関」の語をもって呼ばれることも、この関係が理性の類比者と関係づけられることも決してない。従って我々は、この第二の立場も退けねばならない。

### 3 我々の解釈

バウムガルテンの『美学』全体を丁寧に読んでみると、このいづれとも異なる理性の類比者の像の方がむしろ鮮明に浮かび上がってくる。それは、バウムガルテンが『美学』§二二で挙げている思考の持つ六つの美的品質のいづれかを判定するものとしての理性の類比者という像である<sup>(28)</sup>。そして、この印象は統計的にも裏付けられる。『美学』は九〇四の段落を含むが、このうち「理性の類比者」という語が出現するのは九八である。この九八の段落の中で、何が理性の類比者の相関者とされているかを調べてみると、相関者を特定できないもの一五を除く八三の段落中、約七割の五九の段落で、思考の持つ美的品質が相関者になっていることがわかる<sup>(29)</sup>。次にその典型的な例を挙げる。

「充実した説得性にはどうも幾つかのものが欠けている

ことは理性の類比者にすら明らかでありうるにせよ……」  
[licet aliquando deesse non nihil plenae persuasioni, vel analogo rationis patere possit……]<sup>(30)</sup>

ここでは、所与の思考が、美的品質の一つである説得性(確かさに同じ)を実現しているかどうかの判定が理性の類比者に帰せられている。従って、『美学』において理性の類比者に帰せられる中心的機能は、思考の美的品質の判断であると言うことができる。

さて、理性の類比者は、既に述べたように、「事物の連関を混雑に表象する能力」として規定された。従って、理性の類比者が思考の美的品質を判断する場合の「連関」とは何であるか、そしてこの連関が果たして混雑に表象されているかどうか問われる。第一の問いに答えうるためには、「連関」の正式の規定を見る必要がある。

「理由(条件、仮説)とは、或るものが何故あるかが、そのものから認識されるところのものである。理由を持つもの、言い換えれば、或るものがその理由であるところのものは、その或るものの帰結、それに依

存しているものと呼ばれる。それによって或るものが理由、または帰結、またはその双方であるところの述語は連関である。」(RATIO (conditio, hypothesis,) est id, ex quo cognoscibile est, cur aliquid sit. Quod rationem habet, seu, cuius aliquid est ratio, RATIONA-TIVM eius dicitur, et ab eo DEPENDENS. Praedicatum, quo aliquid vel ratio, vel rationatum est, vel utrumque, NEXVS est.)<sup>(18)</sup>

これによれば、連関とは理由と帰結のつながりである。従って我々の問いは次のように再定式化される。すなわち、思考の美的品質の判断という事態において、いかなる理由—帰結関係が表象されているか。この問いに答えうるためには、思考の美的品質とは何であるかを先ず明らかにする必要がある。思考の美的品質についての最も重要なテキストは、次のものである。

「認識の豊かさ、大きさ、真理性、明らかさ、確かさ、及び生命は、それらが一つの表象において互いに調和する——例えば、豊かさと大きさが明らかさに、真理

性と明らかさが確かさに、他の全てが生命に調和する——限りで、又、認識の他の諸要素 (§ 一八—二〇) がこれらに調和する限りで、全ての認識の完全性を与えよ。」(Veritas, magnitudo, veritas, claritas, certitudo, et vita cognitionis, quatenus consentiunt in una perceptione, et inter se, e. g. Veritas et magnitudo ad claritatem, veritas et claritas ad certitudinem, omnes reliquae ad vitam, quatenus varia cognitionis alia, §. 18-20, consentiunt ad eandem, dant omnis cognitionis perfectionem, phaenomena sensitivae pulcritudinem universalem,...)<sup>(19)</sup>

ここで注目すべきポイントは二つある。第一に、美的品質が完全性の概念と結び付けられていること、第二に、認識の多様な要素、つまり認識を構成する多くの思考がそれに向けて一致するところのものという性格づけが美的品質に対して与えられていることである。第一点について言えば、それは『美学』において問題になる理性の類比者とは先ずもって趣味であることを意味している<sup>(20)</sup>。なぜなら、バウムガルテンは『形而上学』§ 六四〇において理性の類比

者の七つの種を挙げているが、完全性を判断するものは、そのうちの趣味であるからである。

「1) 事物の同一性を認識することの低位能力(これには感性的才知、*ingenium sensitivum*)が属する) 2) 事物の差異性を認識することの低位能力(これには感性的鋭敏さが属する)、3) 感性的記憶力、4) 創作能力、5) 判定能力(これには感性的判断及び諸感覺の判断が属する)、6) 類似の事例の予期、7) 感性的表示能力。これら全ての能力は、それらが事物の連関を表象することにおいて理性に類似している限りで、**理性の類比者**、すなわち連関を混雑に表象する精神の諸能力の総体を構成する。」(1) *inferior facultas identitates rerum cognoscendi, quo ingenium sensitivum, 2) inferior facultas diversitates rerum cognoscendi, quo acumen sensitivum pertinet, 3) memoria sensitiva, 4) facultas fingendi, 5) facultas diiudicandi, quo iudicium sensitivum, & sensuum, 6) expectatio casuum similium, 7) facultas characteristicam sensitiva. Haec omnes, quatenus in representando rerum nexu rationi similes sunt,*

*constituunt ANALOGON RATIONIS, complexum facultatum animae nexum confuse representantium)* <sup>(28)</sup>

第二点、すなわち、美的品質は多様なものがそれに一致するところのものであることについて言えば、これは美的品質が完全なものにおいて占める位置が何であるかを示している。なぜなら、完全なものにおいて多様な要素がそれに一致するところのものは「完全性の焦点」と名付けられているからである。

「もし、同時に取り上げられた多が一の充足理由を構成するならば、それらは一致し、その一致自体が**完全性**である。そして、それへと一致が生ずるところの**一**が、**完全性の規定理由**(完全性の焦点)である。」(Si plura simul sumta vnius rationem sufficientem constituunt, CONSENTIVNT, consensus ipse est PERFECTIO, et vnum, in quod consentitur, RATIO PERFECTIVNIS DETERMINANS (focus perfectionis).) <sup>(29)</sup>

この二が、多が一の起動因、一が多の規定理由とわれ、両

方向の理由―帰結関係が語られている。然るに、理由―帰結関係一般こそは連関に他ならなかった。従って、この完全性の定義を普通に読めば、完全性に関して問題になる連関とは第一義的に多と焦点の間のものであることが理解されよう。然るに『美学』において問題になる趣味の場合、多様な要素とは思考、焦点とはその思考の美的品質であった。従って、趣味が理性の類比者として表象する連関とは、思考とその美的品質との間のものであるということになる。

では、理性の類比者は連関を「混雑に」表象するということを用件をこの場合の趣味の判断は満たしているであろうか。「混雑」とは、明瞭ではあるが、判明ではないということである。そして、連関が混雑に表象されていることの必要十分条件は、理由と帰結がともに混雑に表象されていることと考えられる。なぜなら、理性の類比者と対置される理性、すなわち「事物の連関を判明に表象する知性」<sup>(36)</sup>が連関を判明に表象していることの必要十分条件は、理由と帰結がともに判明に表象されていることであるからである。

「理性の法則はこうである——Bにおいて明瞭に認識

されうる何かが何故あるかがそこから明瞭に認識される。ところの何かであるCをAのうちに明瞭に認識するならば、AとBを連関づけられたものとして私は判明に表象している。」(hac quidem lege: Si in A clare cognosco C, aliquid, ex quo clare cognoscam, cur sit aliquid clare cognoscendum in B. A & B concipio <sup>(37)</sup> connexa.)

例えば、感性的才知がリチャードと獅子の類似性を表象する場合、リチャードも獅子もそれぞれ混雑に、つまり互い同士は無論のこと、他のものからも明瞭に区別することができが、リチャードという表象を更に分析して勇敢さという徴表を析出し、また、獅子という表象を更に分析して勇猛さという徴表を析出し、さらに勇敢と勇猛を分析して勇氣という同じ徴表を析出することはできない。後者をなしうるのは知性的才知である。趣味、すなわち感性的判定能力の場合にもこれと同様のことが言えるであろうか。まず、或る思考の美的品質が問題にされるときには、当該の思考と当該の美的品質とはいずれも明瞭に表象されており、従って、連関は常に明瞭に意識されている。他方、趣

味が或るものの完全性を判定する場合、それに含まれる多様なものの一つ一つは区別されていないし、また、それらが従う完全性の規則も明瞭には表象していない。<sup>(40)</sup> 従って、趣味が表象する連関は混雑に表象されていると言うことができる。このことはまた、イェーガーやベッソルトの解釈を退ける根拠の一つにもなる。なぜなら、もし彼らの言うように、趣味の表象する連関が完全性を構成する多様なもの同士の連関であるとする、定義に従ってこの多様なものは互いに区別されておらず、従って曖昧であるから、それらの間の連関は混雑性という条件を満たさないからである。

## 結

所与のものとその美的品質の結合という位相のもとに美の現象を主題化するというバウムガルテンの思考形式は、彼に直接連なる美学によって受け継がれ、展開されている。例えばカントである。前批判期においてバウムガルテン思想の受容を解して自らの思想を構築した彼は、当然にもバウムガルテンの理性の類比者の概念、及びそれが属す

る思考形式全体をも自らのものとした。批判期に属する『判断力批判』において美の現象が、或る表象に快という述語を結び付ける判断の問題という形で主題化されていることの根は、そのことのうちにある。カントは『レフレクシオン』の一つで「その根拠の意識なしに観念を結合」するのが理性の類比者であると書くが、二つの観念の結合こそは、判断の伝統的定義であったからである。<sup>(41)</sup> 又、現代の分析美学が、もとのその価値品質との連関の論理的分析においてその頂点を極めたのも、この方向での美的論理の展開線上に位置づけられよう。<sup>(42)</sup>

## 註

- (1) バウムガルテン以前の理性の類比者の概念の歴史については、バウムガルテン『美学』松尾大訳、註一(7)参照。
- (2) A. G. Baumgarten, *Aesthetica* § 11 『美学』(自由な技術の理論、下位認識論、美しく思考することの技術、理性の類比者の技術)は、感性的認識の学である。] AESTHETICA (theoria liberalium artium, gnoseologia inferior, ars pulcre cogitandi, ars analogi rationis,) est scientia cognitionis sensitivae.)
- (3) A. G. Baumgarten, *Metaphysica* § 640. など、バウム



全性を主題化するという点で、完全性の美学に属する他の試みから決定的に区別されるが、この認識の完全性を判定する観点から、後述するように、思考の六つの美的品質であるからである。これについては、松尾大「完全性の美学の帰趨——バウムガルテンとカント——」(廣松渉、坂部恵、加藤尚武編『講座 ドイツ観念論』第一巻、弘文堂、平成二年六月)参照。

- (29) 内訳は、品質一般を指すもの一例 (§二五六)、豊かさが一例 (§一六三)、大きさが五例 (§一八三、一九四、二〇四、二〇七、三三八)、真理性が三四例 (§四四〇、四四三、四四四、四四八、四五二、四六四、四六五、四六六、四七〇、四七四、四七九、四八一、四八四、四八九、四九〇、四九八、五〇〇、五〇一、五一四、五三一、五三二、五六二、五六三、五六八、五七七、五八八、五八九、五九〇、五九五、五九七、八六三、八六八、八九一、八九二)、明るさが八例 (§三八、六二九、六三〇、六三一、六三二、六五一、六五三、七四七)、説得性が九例 (§四八二、四八八、八二九、八五七、八五八、八六二、八六五、八七一、八七八)である。
- (30) A. G. Baumgarten, *Aesthetica* § 857.
- (31) A. G. Baumgarten, *Metaphysica* § 14.

(32) A. G. Baumgarten, *Aesthetica* § 22.

(33) それ故に「バウムガルテンが理性の類比者と趣味とは同じ意味として用いたのは、その限りでは正し」(H. Böhm, "Das Schönheitsproblem bei G. F. Meier," *Archiv für gesamte Psychologie* 56, 1926, p. 234f.)°

(34) A. G. Baumgarten, *Metaphysica* § 640.

(35) A. G. Baumgarten, *Metaphysica* § 94.

(36) A. G. Baumgarten, *Metaphysica* § 640.

(37) A. G. Baumgarten, *Metaphysica* § 642.

(38) cf. A. G. Baumgarten, *Metaphysica* § 574: 「事物の同一性を洞察する能力、すなわち才知の法則はこうである。『Aの徴表がBの徴表として表象せられてゐるならば、AとBとは同一のものとして表象せられてゐる。』」

(39) cf. A. G. Baumgarten, *Metaphysica* § 575: 「事物の同一性又は差異性を私は判明に、又は感性的に知覚する。従って同一性又は差異性を知覚する能力、すなわち才知、鋭敏さ、明敏さは、感性的であるか、知性的であるか、*ibid.* § 641: 「事物の同一性と差異性を判明に洞察する能力、従って知性的才知と鋭敏さ……」

(40) C. Wolff, *Vernünftige Gedanken von GOTT, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen*

überhaupt (*Deutsche Metaphysik*), II. Aufl. Halle und Frankfurt 1751, § 415: 「完全性の表象は、単に非明なもののうちならず。その場合、規則との一致が非判明のみ表象されてゐることは、次のことより推定し得る。建物を観てゐるときたれば、全ての規則を熟考し、正規の推論によつて目下の建物に当てはめることは不可能であらう。ましてや、これに次いで、建物を見出される全てのものの完全な一致が、つかはされてよつて中たれつゝあるか、その同時の熟考するものは不能といふべし。」 J. C. Gottsched, *Ausgewählte Werke*, Bd. 5 *Welthweiskheit*. Hrsg. v. P. M. Michel, Tl. 1. *Erste Gründe der gesamten Welthweiskheit* (Theoretischer Teil) Berlin 1983, § 929: 「趣味とは何か。明瞭さのみを認識された完全性といふことの判断である。複合概念をばつて、多くの一致するものを知覚してゐると強うが、それらを判明とは分離したつゝ、それに見出される完全性の規則を説明したつゝは、いかにいふに、**好む物が美しつゝと判断しつゝする。**」 A. G. Baumgarten, *Aesthetica* § 35: 「平凡ではなく、精妙な趣味に対する性向。この趣味は明瞭々と共に感覺表象、想像表象、創作表象などの下位の判定者とならねばならぬが、それは、個々のものを悟性を介して判定することが美たによつて重要

であるべきである。」 (Dispositio ad saporem non publicum, immo delicatum, qui cum perspicacia sensorum, phantasmatum, fictionum e. c. index inferior sit, quotiescumque diiudicari singula per intellectum non interest pulchritudinis.) *ibid.* § 98: 「……はを悟性と理性といふ一層判明の輝きを以て、悟性的判断力が、技術的美学の諸規則を、個々のものを知り得るべきに、彫琢は成つて来らざるべきである。」 (… poterit peragi, iam distinctus praeiudicatus intellectu et ratione, iudicioque intellectuali ad aesthetices etiam artificialis regulas singula exigente.)

(14) Kant, *Reflexion* 149: “Analogon intellectus: Verknüpfung der ideen ohne Bewusstseyn./Analogon rationis: Verknüpfung der ideen ohne Bewusstseyn ihres Grundes.”

(15) C. Wolff, *Deutsche Logik*, 3. Capitel, § 2: *Logica*, § 40: J. C. Gottsched, *Welthweiskheit*, I, 5f.

(16) D. W. Crawford, “Reason-giving in Kant’s Aesthetics,” *JAAC* 28 (1970), 505: R. Bittner, “Ein Abschnitt sprachanalytischer Ästhetik,” R. Bittner und P. Pfaff (Hrsg.), *Das ästhetische Urteil* (Köln 1977),

p. 251f.

(本研究は、平成元年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。)